

令和4年度
入学試験問題

第3回

国語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから16ページまであります。

受験 番号		氏 名	
----------	--	------------	--

森村学園中等部

一 次の文章は、視覚障害者である石田由香理さんの経験が書かれた本の最後にあり、石田さんの大学の担当教授である西村幹子さんがつづつたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

ノーベル経済学賞を受賞したアマルティア・センという人が、人びとの人生の選択肢を広げるために必要なのはケイパビリティだと言いました。ケイパビリティというのは、例えば、自転車を持っていくけれど、その乗り方を知らなければ、自転車は何の役にも立ちませんが、乗り方を覚えれば、自宅から遠い通学や通勤、通院などが可能になるというように、何を所有するかではなく、機会を実際に活用できる可能性や能力のことを指します。

例えば、学歴で考えてみましょう。学歴を得ることによって、一般的には就業機会や所得が増える、と考えられています。

I

学歴を得ても、常に他人の荷物になっているのでは、と周囲を気にしながら自分の行動範囲を狭めていては、その能力を生かすことはできません。また、障害を理由に働く機会が得られないことも、本人の努力や資格とは関連のないところで選択肢が狭められていることになります。大学一年の頃の石田さんは、せっかく希望した大学に入っても自信を持って人と関わることができず、役割を見出すことができませんでした。また、石田さんが出会ったフイリピンの障害児たちは、教育機会を与えられていても、そこでの学習は事実上皆無に等しく、その結果として彼(彼女)らの人生の選択肢の拡大にはつながっていません。ここでは教育(学歴)がケイパビリティを強化することにはつながりません。このように考えると、私たちを取り巻く社会は、物や資格で溢れているけれども、それらが一人ひとりの選択肢を拡大しているとは言えないことが多くあるのではないのでしょうか。

ケイパビリティを得るためには、教育ももちろん必要ですが、それと同様またはそれ以上に、他者と支え合えること、頼ったり、頼られたりする能力が人生の選択肢を広げる際には重要です。他者との信頼関係、さまざまなネットワークや他者とのつながり——ソーシャルキャピタル(社会関係資本)などともいわれることがあります——を自ら築くことができると、私たちの可能性は大きく広がっていくのではないのでしょうか。

この信頼関係に基づいた相互扶助の必要性は、障害のある人たちだけに限りません。障害者の家族や周囲の人たちも、頼ったり、頼られたりする関係性が必要なのだと思います。石田さんのご家族も障害児をもつ親、家族として社会の中で特別視や排除され、孤立された経験があるのかもしれませんが、それら乗り越えようとさまざまな葛藤と闘ってこられたのだと思います。②そのような葛藤を強いているのは、個人的な能力や経験不足ではなく、ソーシャルキャピタルが不足した社会そのものであるともいえると思います。

(中略)

③ 障害は社会的に作られるもの、という考え方があります。例えば、アフリカのある地域には、口承伝統をもち、書く文字がない社会があります。そのような社会では、目が見えないということはあまり問題にはなりません。

II

書き言葉をあまり使わない社会では視

覚障害は深刻な「障害」とは広く認識されないこととなります。実際、視覚障害者が政府やビジネスで活躍することは珍しくないので。

もちろん、障害といってもさまざまなレベルがあることは確かですが、各個人にとって何ができるか、は場面場面で異なっているかもしれません。また、石田さんが授業の中で指摘したように、学校建設が進んでも、学校へ辿りつくまでの手段が得られなければ、教育機会は拡大しません。逆に言えば、学校へ辿りつくためのガイドが得られれば、視覚障害児は問題なく登校することができるのです。前者の場合には、視覚障害が通学の障害になりますが、後者の場合には障害にはなりません。個人に障害があることが問題なのではなく、障害を感じさせるような環境が障害であるとも言えます。

もう一つ、「統計的差別」という言葉があります。

Ⅲ

、男女で言えば、平均値をみると男性の方が女性よりも体力があるため、長い距離を走ることが体育などの授業で当然視されているような場合があります。これは、平均値から個々人の機会を規定する、という意味で統計的差別と言われるものです。もしかすると女性でも長距離を走ってみたい人がいるかもしれませんが、男性でも体が弱く長距離を走るとは難しい人がいるかもしれません。個々人は多様であるのに、男女という切り口でどれくらいの距離を走るかという機会を限定されてしまふのです。

同じことが障害者にも言えるのではないのでしょうか。平均から見たら、障害があることで「できない」ことが増えるかもしれませんが、しかし、石田さんのような例を見ると、個人に注目して、その可能性を引き出せるような環境づくりこそが求められているように思えます。支援する、あるいは配慮するという名目で、社会が個々人の可能性を決めつけてしまうことが、障害自体を作り出すことになるかもしれない、ということをおたちは頭の片隅に置いておく必要があるのではないのでしょうか。

(中略)

では、どのような社会がすべての人にとって住みやすい社会でしょうか。(中略) 国連で最近よく言われるのが、「経済的に成長しながらも持続可能で、公正かつインクルーシブな社会」です。二〇一四年六月に国連総会に提案された目標は一七目標ありましたが、そのうちの四目標において「インクルーシブ」という言葉が用いられ、「インクルーシブな社会」「インクルーシブな経済成長」「インクルーシブな質の良い教育」などと表現されています。

インクルーシブな社会、インクルーシブな教育とは何を指すのでしょうか。国際協力機構(JICA)は二〇一一年の年報の中で、インクルーシブを「すべての人が恩恵を受ける」と説明しています。すべての人が恩恵を受ける社会とはどのような社会を指すのでしょうか。それを考える上でヒントになるのは、先ほど述べた「ケイパビリティ」の概念をめぐっての議論です。ケイパビリティとは、人生の選択肢を拡大する(潜在)能力のことですが、この能力は、すべての人に同時に開かれるものか、という点に注目してみましよう。

誰かのケイパビリティが拡大することが誰かのケイパビリティの縮小につながることはないのでしょうか。あるいは誰かの犠牲の上に誰かのケイパビリティが拡大することはないでしょうか。例えば、貧しい国で家庭の学費負担が大きいとき、一人の子どもしか学校に送れないため

に男の子を学校に行かせる、ということがあります。男女どちらかの選択肢が拡大するとどちらかの選択肢が狭まるという関係になることはよくあります。

④もつと世界規模で考えてみると、私たちの身近なところにも多くの課題があります。【 つまり、社会の中で個人が選べる選択肢が増えることと、社会全体の選択肢がどのように配分されているのか、ということを経合して考えないと、インクルーシブな社会には辿りつきません。そして、世界のすべての人のケイパビリティを拡大するには、先進国と言われる私たちの社会の生活自体を見直すことが必要な場合があるのです。

このように考えていくと、インクルーシブというのは、単に「弱者」を取り込もうとするものでも、「弱者」に対する追加的な措置を施すことでもなく、むしろ⑤「主流派」のあり方や資源や機会の配分を見直すことであることが分かります。インクルーシブ教育についても、障害児の家族が、特別支援学校、特別支援学級、普通学級等、いくつかの選択肢を与えられることをもってインクルーシブとするのか、主流である普通学級のあり方そのものを、障害児を含む多様な個人を受け入れる方式に変化させることをもってインクルーシブとするのか等、さまざまな考え方が存在します。誰のどのような選択肢が拡大するのか、について私たちはじっくり議論する必要があります。

すべての人が、自分の可能性を広げることができるとするには、不平等な関係を克服し、選択肢をめぐる交渉や利害関心の摺り合わせが行われる必要があるでしょう。そのためには、多様な人々が相互に関わりを持ち、対話することが最も重要ではないでしょうか。そして、「支援する側」、「される側」や「強者」と「弱者」という不平等な関係性によって成り立つ社会ではなく、誰もが「必要とされている」と感じられる共生社会に変えていくことができれば、私たちの社会ももう少し生きやすくなるかもしれません。石田さんの生き方は、そのことを教えてくれているように思えます。

(石田由香理・西村幹子『できること』の見つけ方)より)

※ 問題作成の都合上、原文の表記を一部改めたり、文章の一部を省略したりしたところがあります。

(注) * 石田さん……この文章の共著者である石田由香理氏。視覚障害を持っている。

* ソーシャルキャピタル (社会関係資本) ……人々がお互いに信頼したり協調したりして行動することで、社会の効率が高まるという考え。

* 相互扶助……互いに助け合うこと。

* 口承……口から口へと語り継ぐこと。

* 特別支援学校、特別支援学級……障害等がある児童・生徒が通う学校や学級。

問一

I	から	III
---	----	-----

 に当てはまる語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 例えば イ なぜなら ウ しかも エ しかし オ つまり

問二 ——— ①「人びとの人生の選択肢せんたくしを広げるために必要なのはケイパビリティだ」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「ケイパビリティ」とは何ですか。それを説明している部分を本文中から、十五字以上二十字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出さなさい。

(2) 「ケイパビリティ」を活かして人生の選択肢を広げている例として**適当でない**ものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア Aさんは大学時代に栄養士の資格を取り、現在は保育園の給食のメニューを考えたり調理を指導したりする仕事に就いている。

イ Bさんは会社を退職した後に、エンジニアとして身につけた知識を用いて地域の子供を集めて工作教室を開いた。

ウ こけし職人のCさんは、購入したパソコンで通信販売のサイトを作成し、海外の人に向けてこけしの販売を始めた。

エ Dさんは手話に興味を持ち、一般的に使われている手話とは**違う**自分のオリジナルの手話を創作することに熱中している。

問三 ——— ②「そのような葛藤かつとうを強いているのは、個人的な能力や経験不足ではなく、ソーシャルキャピタルが不足した社会そのものである」とありますが、この部分で述べていることはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 障害者が自分の可能性を広げていくことができないのは、個々人の障害や経験の不足のためではなく、障害者に活躍かつやくの機会を提供できない社会に原因があるということ

イ 障害者が自分の可能性を広げていくことができないのは、ケイパビリティを得るために必要となる他者との信頼関係しんらいを障害者が築けない社会に原因があるということ

ウ 障害者の家族が孤立感こりつかんや疎外感そがいかんを感じるの、障害者の家族と周りの人たちが信頼関係を作れるようなネットワークを提供できない社会に原因があるということ

エ 障害者の家族が孤立感や疎外感を感じるの、障害者の家族がこれまで問題を乗り越えてきた経験を他の障害者の家族と共有するシステムがない社会に原因があるということ

問七

——①「どのような社会がすべての人にとって住みやすい社会でしょうか」とありますが、筆者はこの問いに対して「インクルーシブな社会」と共にどのような社会が「住みやすい」と述べていますか。本文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問八

この文章で述べられている内容として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 科学が未発達なアフリカでは、不自由が当たり前という考えであるため、目が見えないことは障害と認識されない。
- イ 障害者に配慮して、できそうにないことをあらかじめ取り除いてあげることが、逆に障害者の妨げになることがある。
- ウ インクルーシブな社会を作るためには、「強者」が「弱者」の立場に立ち、積極的な支援を行うことが重要である。
- エ 国際協力機構が提案するインクルーシブな社会が実現すれば、世界中のすべての人のケイパビリティが拡大する。

問九

本文の特徴の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本に住む障害者である石田さんと「フィリピンの障害児たち」のそれぞれが置かれている状況を比較することで、国による政策の違いを明確にし、有効な障害者支援の在り方を提案している。
- イ 「障害は社会的に作られるもの」という一般論を提示し、続いてその一般論に当てはまらない具体例をいくつか挙げることで、一般論とは異なる筆者の主張に説得力を持たせている。
- ウ 段落のはじめに「ケイパビリティ」や「統計的差別」といったキーワードを提示し、続いてそのキーワードの具体例を挙げることで読者がキーワードで示された内容を理解しやすいようにしている。
- エ 本文の前半に提示した「ケイパビリティ」というキーワードを本文の後半でも再び取り上げること、後半の内容が前半で述べられている筆者の主張の繰り返しであることを示している。

問十 次に挙げたのは、この文章を読んで先生と生徒が話をしている様子を記したものです。これを読んであとの質問に答えなさい。

先生 「筆者はこの文章の中で『多様な人々』と関わるのが重要だと述べています。また、昨年の夏に開催された東京オリンピック・パラリンピックの理念の一つも『多様性と調和』でしたね」

A君 「『多様な人々』って例えばどんな人たちだろう」

Bさん 「本文にも出てきたように障害を持っている人や、性別・人種・宗教などが違う人かな」

C君 「ふーん、でも、自分と身体の状態や文化が違う人と行動するより、同じ人と行動する方が楽し、スムーズだと思うな」

先生 「なるほど。でも、ある美術館では、あえて目の見える人と目の見えない人が一緒に活動をする取り組みをしています。彼らが五人くらいのグループを作って一緒に絵を鑑賞するのです」

A君 「目が見える人が目の見えない人に言葉で絵を説明してあげるといことですか？」

先生 「そうです。ただ『見えているものと、見えていないものを言葉にしてください』という条件があります。つまり、絵に描かれているものだけでなく、その絵を見た印象やどんな絵だと思ったかという自分の考えを伝えるということですね」

Bさん 「目が見える人が、目が見えない人の絵の鑑賞を助けてあげるんですね。目が見えない人にとっては、絵がイメージできて良い取り組みですね」

先生 「そうですね。でも、実はこの取り組みの狙いは目が見える人の方にあるのですよ。目が見える人の絵画のとらえ方や伝え方に良い変化が生まれるのです。その証拠にこの取り組みでは目が見えない人の方が『ナビゲーター（導く人）』と呼ばれているんですよ」

Dさん 「面白いですね。ナビゲーターによって『目が見える人』にどんな良い変化が起こるのかな？」

質問 —— 「良い変化」とありますが、目が見える人に起こる「良い変化」とはどのようなことだとあなたは考えますか。簡潔に答えな

なさい。

二 浅田政志は、日本各地の家族の写真を撮るプロの写真家である。東日本大震災後、岩手県に住む高田家（政志がプロの写真家になってからの最初の依頼者）の安否を確認するために政志は岩手県を訪れたが、彼の心に震災の惨状は深く突きささり、彼はそれ以後、写真を撮ることが出来なくなってしまう。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

入り口から少し離れた片隅で、眼鏡の青年が、タオルで何かを拭いている。

それが泥だらけの写真だと気づいた瞬間、政志の足は、すぐそちらへ向かって歩き出していた。

「えっ」

信じられなかった。

二台の長机と地面に敷いたブルーシートの上に、おそらく千枚以上の写真とアルバムが並べられていた。人物や風景や物、白黒にカラー、撮られた時代も様々で、状態の良いモノもあれば、表面が剥がれて何の写真かわからないモノもある。

控えめな手書きの貼り紙には、こう書かれていた。

【みなさんの写真をお返ししています。ご自由にご覧下さい】

政志は激しく心を揺さぶられた。同時に、写真家である自分の中で、フツフツと湧き上がってくる衝動を感じた。持ち主を失った写真たちを目の前に、悲しさ、悔しさ、責任感、義侠心、様々な感情が生まれ、この地で消えかかっていた政志の存在に、再び輪郭を与えていく。

自分にも何かできるかもしれない。いや、どうしても何かしたい。

そう思った政志は、もう止まらない。

青年を見ると、バケツの水で汚れたタオルをすすいでいる。その横には、泥だらけの写真が、まだまだ大量に置いてあった。

政志は、ゆっくり歩み寄り、優しい口調で話しかける。

「寒くないですか？」

どこか空虚で疲れた表情の青年は、チラッと政志の方を見て、

「あ、いや、まあ……」

「よかったら、僕も」

「はあ、どうぞ、自由に見て下さう」

③ それだけ答えて、作業を続けた。

言葉の意味を勘違いされた政志は、作業をする左腕に、そっと手を添えた。

青年はハッと、政志の方を見た。

「僕も、手伝っていいですか？」

政志がニヤツと微笑むと、青年は自分の勘違いに気づき、

「あつ、はい、もちろんです」

と嬉しそうに返事をした。

早速、政志は背負っていたリュックを下ろし、上着の袖を捲り上げると、両腕の刺青が露わになった。それを目にした青年は、ギョツとして思わず半歩退いた。

「大丈夫大丈夫、前科は無いですから。浅田と申します」

「お、小野と申します」

人懐っこい政志の笑顔を見た小野洋介は、直感的にこう思った。

刺青は極道並みだけど、きつと悪い人ではなさそうだ。

少し安心したのも束の間、政志は汚れた写真を一枚手に取り、躊躇なくバケツの水に浸した。

「いやいやつ、ちよ、ちよつとそれはっ」

慌てて止めようとする小野に、

「大丈夫ですよ。一応、普段は写真の仕事をしてるんで」

「そ、そうなんですか。え、でも、これ消えちゃいませんか？」

「いえ、写真は本来プリントする時も、最後は水で洗うんですよ」

冷静に答える政志は、水の中での洗浄作業も、慌てず丁寧に進めた。

「こうやって、優しく指の腹で擦ってやれば」

写真の表面の汚れが少しずつ取れていくのを、二人は息を呑んで見守った。

「よし、良い感じかな」

水の中から、ゆっくり取り出された写真は、濡れタオルで拭くよりも、断然キレイになっていた。

「お〜」

思わず感嘆の声を上げた小野は、こう思った。

刺青は極道並みだけど、この人は凄い人かもしれない。

「あの、これを、どこかに干せると良いんですが？」

「あつ、はい、了解です。」

写真を受け取った小野は、とりあえず、ブルーシートの上を整理して干すスペースを作り始めた。政志は、ポケットの中から高原家の前で拾った写真を取り出した。泥だらけで何が写っているのかわからない。水の中で洗浄すると、出てきたのは、弾けんばかりの笑顔たち。見ているこっちまで笑顔になりそう、とても素敵な誰かの家族写真だった。

この写真を、持ち主の家族に返すことができれば良いな。

写真家だからではなく、ごく自然に人として、政志はそう思えた。

もう一つあったバケツにも水を入れ、知り合ったばかりの二人は、黙々と写真洗浄作業を続けた。

(中略)

翌日も、朝九時前には、大勢の被災者が役場前に集まって来ていた。

(中略)

一人で写真洗浄返却を始める準備をしている小野は、トラックから支援物資を下ろすボランティア達を見て、手を止めた。

「……」

一日に、写真を見に来てくれる人は、多くても三十人くらい。その内、実際に写真を見つけて返却できる人は、一人か二人。一枚すら返却できない日もあった。

果たして、このまま続けることに意味はあるのだろうか？

ここ数日、小野はずっとそのことを考えて苦しんでいた。そんな中、昨日、政志と出会い、新しい洗浄方法を教えてもらったことは、小さな希望だった。

小野は、気を取り直して準備を再開した。

長机の上に、アルバムを並べていると、人混みの向こうから、何やら大きな白いボードがユラユラ近づいてくるのに気づいた。

「？」

よく見るとそれは、畳一畳ほどあるプラスチックボードを担いでヨロヨロ歩いてくる政志だった。

「写真、これに貼ったら、どうかかなと思って」

「え、え、浅田さん、今日も？」

「ダメかな？」

「ダメじゃないです。喜んで！」

小野は、嬉しさのあまり大声で返事をした。

(中略)

二人が洗淨作業をしていると、展示ボードの前で「あら！」と女性の声が上がった。

急いで駆け寄ると、^④五十代くらいの夫婦が指差していたのは、おそらく二十年以上前の結婚式の写真だった。

「お父さん、若いわね、それに細い」

「ハハハ、お前だって、綺麗だなあ」

夫婦は、高砂に座る自分達を見て、懐かしそうに微笑んだ。

「また一から、このころに戻ったと思えば……」

妻の頬に、涙が一筋流れた。

「ああ……」

夫は、ポケットからシワだらけのハンカチを取り出し、妻に手渡した。

「ごめんなさいね、アイロンもかけてあげられなくて」

妻は、そう謝ってから、夫のハンカチで目元を拭った。

「あの、これは持って帰っても？」

夫の問いかけに、政志と小野は、

「もちろんですっ」

と同時に答えた。

ビニールポケットから写真を取り出した夫婦は、二人に一礼し、肩を寄せ合いながら帰って行った。

政志が小野を見ると、小野も政志を見ていた。一瞬の沈黙のあと、思わず抱き合っあって喜びを分かち合った。

(中略)

翌日、政志と小野は、小型のリヤカーを引いて被災写真の回収に出た。(中略)

小一時間、町中を廻めぐっただけで、リヤカーに半分ほどの写真とアルバムが集まった。

風で舞い上がる砂埃すなほこりと重機の音が鳴り響ひびく中、重くなったりリヤカーを、小野が引つ張り、政志が後ろから押おして進んだ。

「親友が、津波に流されちゃって」

突然、小野が前を向いたまま、ポツリポツリと話し始めた。

「最初は、その親友を捜さがしてたんです。そしたら偶然、知り合いの写真を拾って、届けたらとても喜ばれて。それが、写真返却を始めた

きっかけなんです」

政志は、小野の背中を見ながら、静かに耳を傾ける。

「でも、親友も見つからないのに、今、こんなコトしてて本当にいいのかって、わからなくなってきた、なのに、写真はどんどん集まってくるし、一人ではもう、苦しくて……そんな時に、浅田さんが、現れて……」

感情が溢れて言葉に詰まった小野は、リヤカーを止め、目元を拭った。

「すいません……」

「いや、うん」

政志は、小野が背負っている悲しみと本当の気持ち、初めて知った。

(中略 小野と政志の二人で続けてきた写真返却の活動に、外川美智子が参加するようになり、三人で活動を続ける。)

役場の建物内は、依然、慌ただしく人々が入り出しているものの、怒号が飛び交うこともなくなり、混沌とした状態からは脱しつつあった。そんな中、エンジのヤッケを着た無精髭の地元漁師・洪川謙三が、今日も掲示板の前に一人立っていた。もう十分以上、その場を動かさず一点を見つめている。死んだ魚のような目で。

写真展示ボードは、常時、三、四人に見てもらえていた。その中から聞こえる「あつた」という声が、三人の喜びであり、やりがいだった。建物から、ポケットに手を入れたまま出てきた洪川は、作業する三人を一瞥すると、迷うことなく歩み寄り、すぐ側で立ち止まった。展示されている写真をゆっくり見渡したあと、突然、

「お前ら邪魔だ！」

と大声で恫喝した。

三人は驚いて、洪川の方を見た。

「目障りなんだって！ 人様の写真、勝手に触っていいど思ってたのが？ 誰に許可もらって見せびらかしてんだ！」

一番近くにいた小野の襟元をグイッと掴み上げ、

「まだ……まだの人間だっぺいんだ！」

そう言うって突き放し、よろける小野などお構いなしに、洗浄前の写真が入った箱を乱暴に蹴り上げ、洪川は行ってしまった。

「なん、何だあのクレーマー。あんなの、気にしちやダメだっ」

強気で反論した美智子は、愕然と立ち尽くす小野に気づき、もう一度、

「ダメだからね」

「……はい」

小野の返事は、消え入るくらい小さかった。

三人とも、気にしちやダメだと思いなながらも、内心、気にしないわけにはいかなかった。なぜなら、洪川の言葉が、全て間違っているとは

言い切れないから。

写真はプライバシーに関わるモノなので他人が扱(あつか)うべきではない。それが正しいと言われたら、もうこの活動は成立しない。でも、一度失った写真を見つけて喜ぶ人々の姿を何度も見た政志には、この状況(じじょうきょうか)下で、被災した写真を持ち主に返す行為(こうい)自体が間違っているとは、絶対に思えなかった。

(中野量太『浅田家!』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) *義侠心(ぎぎやくしん)……正義をまもり、弱いものを助けようとする気持ち。

*刺青(いれずみ)……皮膚(ひふ)に傷(きず)をつけ、墨(すみ)や朱(しゆ)で、印(いん)や模様(もやう)をつけること。また、その印・模様。

*極道(ごくどう)……悪事(あくじ)をする人。

*躊躇(ちゅうちよ)……ためらうこと。

*高砂(たかさご)……結婚式(けっこんしき)の花婿(はなむこ)・花嫁(はなよめ)が座(ま)るメインの席(せき)。

*無精髭(ぶしょうひげ)……そるのが面倒(めんどう)で、伸びたまま(の)にしている髭(ひげ)。

*一瞥(いちべつ)……ちらつと見ること。

*恫喝(どうかく)……おどしつけること。

問一 ㉠「息を呑んで」・㉡「死んだ魚のような目」の、ここでの意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答

えなさい。

㉠「息を呑んで」

ア 気を落ち着かせるように息を吸って

イ はっとするように息を止めて

ウ どうなるのか疑うように息を殺して

エ ほっとしたように息をついて

㉡「死んだ魚のような目」

ア うらみをこめているような鋭(すまど)い目

イ 動くことができないような苦し気(くるしみ)な目

ウ 酒を飲みすぎたような充血(じゅうけつ)した目

エ 生気を失ったよう(な)なうつつろな目

問二

①「同時に」はどの言葉にかかりますか、記号で答えなさい。
 同時に | ア 写真家である | 自分の中で、 | イ フツフツと | ウ 湧き上がってくる | エ 感じた。

問三

②「政志の存在に、再び輪郭を与えていく」とありますが、この表現から、政志のどのような様子が読み取れますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 並べられた写真を見たことで、政志が、写真家としての誇りと、写真と前向きに向き合う気持ちを取り戻していく様子
- イ 並べられた写真を見たことで、政志が、震災によるショックで失っていたさまざまな感情をよみがえらせていく様子
- ウ 並べられた写真を見たことで、政志が、写真家としてではなく一人の人間として写真と関わり続けることを決意する様子
- エ 並べられた写真を見たことで、政志が、生きる気力を失くしていた自分を恥じてゼロからやり直そうと改心する様子

問四

③「言葉の意味を勘違いされた」とありますが、どう勘違いされたのですか、「政志が」 a といいつもりで言った言葉を、小野には b と解釈された。」の a と b を補う形で、それぞれ五字以上十字以内で答えなさい。

問五

~~~~~ A から D までの、小野の政志に対する感情の変化を説明したものととして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 初めは近寄ってはいけない存在だと驚くが、外見と内面は違うのかも知れないと思いつす。しかし、政志の写真を洗う行動に驚愕し、政志が写真をまともにあつかえるのか疑わしく思うが、キレイになった写真を見て政志の力量を見直すとともに感嘆する。
- イ 初めは自分に危害をもたらすのではないかと政志を恐れしたが、その笑顔にごまかされそうになる。そして、政志の写真を洗う行動にやはり信じてはいけなさと確信するが、キレイになった写真を見て、彼の技術だけは一流だと感動する。
- ウ 初めは一般人ではないのだと避けようとするが、政志から「前科は無い」と言われて考え直す。ところが、政志の写真を洗う行動で、写真をまかせたことを後悔するが、思いつきの行動でも写真はキレイになることにびっくりして賞賛する。
- エ 初めは政志と親しくすることはやめようと決めるが、写真を返却する手伝いは欲しいので、彼を「悪い人ではない」と思い込もうとする。けれども、政志の次の行動に「やはり悪い人だった」と思うが、悪い人でも写真がキレイになればいいかと考え直す。

## 問六

——④「五十代くらいの夫婦」のエピソードが持つ効果として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 震災のもたらした傷跡を抱えた被災者の中にも、互いに支え合い、再び前を向いて歩き出そう、と決意する人たちがいることを読者に伝える効果

イ 被災前には、ごく普通の、幸せな時間が被災者にもあったことを描くことで、いつ、どこでも同様の災害が起こりうることを読者に警告する効果

ウ 失った写真を見つけて喜ぶ人を描くことで、政志が、写真を返却する活動を洪川に非難されても自分の活動は正しいという信念を貫いていくことを読者に納得させる効果

エ ここまでの被災地の重苦しい雰囲気から一転し、心温まる優しいエピソードを入れることで、読者に気分転換をさせて、続きを読もうという気にさせる効果

オ 写真返却の活動に好意的な反応をする夫婦を登場させることで、その活動を頭ごなしに反対する洪川の言動を読者に強く印象づける効果

カ 被災し日常生活を失っても、自分の至らなさを謝る妻を描くことで、東北地方には、日本の古い男女の価値観が今も息づいていることを読者に伝える効果

## 問七

——⑤「小野が背負っている悲しみと本当の気持ち」とありますが、「本当の気持ち」とはどのような気持ちですか。四十字以上五十字以内で答えなさい。

## 問八

本文の内容と表現の特徴の説明として、**適当でない**ものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 小野は、写真返却の活動を続けることに自信を失いかけていたが、政志がその活動に参加してくれたことによって、その活動が独りよがりではないという自信を持つことになる。

イ 写真返却の活動は、写真に関わる仕事であることに加えて、人を喜ばせる活動であることが、震災によって迷いが生じた政志の心を立ち直らせることにつながっている。

ウ 洪川の写真返却の活動に対する言動は荒々しく攻撃的だが、その言葉からは洪川の抱える悩みや苦しみがかげえ、単なる言いがかりではないことがわかる。

エ 美智子は洪川を単なるクレーマーと決めつけ、落ち込む小野を支えようとするが、小野は洪川の指摘することに思い当たることもあり、写真返却の活動に再び自信を失ってしまう。



才 会話文のほとんどをあえて短文にしたりその文末を省略したりして、読者にその短い文の背後にある言葉や省略されている部分を好き勝手に想像する読み方を許している。

カ 全体がわかりやすい平易な言葉で書かれており、その時々登場人物の心情をていねいに描写<sup>びやうしゃ</sup>することで、読者に作品に対する親しみやすさを抱<sup>いだ</sup>かせる。

三

次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- ① 試合はエンチョウ戦に入った。
- ② リコ的な考えをさける。
- ③ ジキユウ走で校庭をまわる。
- ④ マットの上でチュウガエりする。
- ⑤ 難民をキュウサイする。
- ⑥ 室町時代の水墨<sup>すいぼく</sup>画をフクセイする。
- ⑦ 父の病状はイツシン一退だ。
- ⑧ 舞台<sup>ぶたい</sup>の大役をツトめる。
- ⑨ そばに薬味をそえる。
- ⑩ かれはすぐに同調して節操がない。
- ⑪ 幕間<sup>まくま</sup>に食事をとる。
- ⑫ 容器を密閉する。